

【晉紀二十七】 起昭陽協洽，盡閏逢涒灘，凡二年。

■東晉、●北魏 ▲後燕(国会図書館デジタルコレクション・続国訳漢文大成. 經子史部 第 6 卷 6-250p)

烈宗孝武皇帝上之下太元八年（癸未，383年）

前秦春，正月，秦の呂光は長安を發し，鄯善王の休密駄、車師前部王の彌寶を以て郷導と為す。

■三月，丁巳（28日），大赦。

■[東晉の桓沖の襄陽攻撃と反撃]夏，五月，桓沖は衆十萬を帥いて秦を伐ち，襄陽を攻める。前將軍の劉波等を遣わして沔北の諸城を攻めしむ。輔國將軍の楊亮をして蜀を攻めしめ，五城を抜き，進みて涪城を攻める。鷹揚將軍の郭銓をして武當（湖北省襄陽道穀城県の東、現・襄陽市穀城県）を攻めしむ。六月，沖の別將は萬歲（城名、筑陽に近い）、築（続は筑）陽（穀城県）を攻め，之を抜く。秦王の堅は征南將軍の巨鹿公の睿、冠軍將軍の慕容垂等を遣わして歩騎五萬を帥いて襄陽を救わしめ，兗州刺史の張崇をして武當を救わしめ，後將軍の張蚝、歩兵校尉の姚萇をして涪城を救わしむ。睿は新野に軍し，垂は鄧城（襄陽の北）に軍す。桓沖は退きて沔南に屯す。秋，七月，（6-251p）郭銓及び冠軍將軍の桓石虔は武當に於いて張崇を敗り，二千戸を掠めて以て歸る。巨鹿公の睿は慕容垂を遣わして前鋒と為し，進みて沔水に臨ましむ。垂は夜軍士に命じて人ごとに十炬を持ち，樹枝に繫かしめて，光は數十里を照らす。沖は懼れ，退きて上明に還る。張蚝は斜谷を出，楊亮は兵を引いて還る。沖は其の兄の子の石民を表して襄城太守を領し，夏口に戍せしめ，沖は自ら江州刺史を領するを求める。詔して之を許す。

前秦 [苻堅の大挙南進の策と反対意見]秦王の堅は下詔して大舉して入寇せんとし，民は十丁毎に一兵を遣わす。其の良家の子は年二十已下にして，材勇有る者は，皆な羽林郎を拜す。又た曰く、

「其れ司馬昌明（晉の孝武皇帝）を以て尚書左僕射と為し，謝安を吏部尚書と為し，桓沖を侍中と為さん。勢い（を見て言えば、晉に勝って）還らんこと遠からず，先ず（昌明・安・沖の）^{ため}に第を起こす可し。」

良家の子の至る者は三萬餘騎，秦州の主簿，金城（続は無し）の趙盛之を拜して少年都統と為す。是の時，朝臣は皆な堅が行くを欲せず，獨り慕容垂、姚萇及び良家の子は之を勸める。陽平公の融は堅に言つて曰く、

「鮮卑（慕容垂）、羌虜（姚萇）は，我之仇讎なり，常に風塵之變を思い以て其の志を逞しくし，^{なら}陳べる所の策畫は，何ぞ従う可けん也！良家の少年は皆な富饒の子弟にして，軍旅に間（続は閑）せず，苟しくも^{てんゆ}諂諛之言を為し以て陛下之意に會わんとす耳。今陛下は信じ而して之を用いるは，輕々しく大事を舉げれば，臣は恐らくは功既に成らず，仍って後患有り，悔いるとも及ぶ無からん也！」

堅は聽かず。

【淝水の戦いで前秦苻堅壊滅】

前秦 [歩騎二十五萬、慕容垂らの思惑]八月，戊午（2日），堅は陽平公の融を遣わして張蚝、慕容垂等歩騎二十五萬を督して前鋒と為らしむ。兗州刺史の姚萇を以て龍驤將軍と為し，益、梁州の諸軍事を督せしむ。堅は萇に謂つて曰く、

「昔朕は龍驤（自身が龍驤將軍當時に苻生を倒して即位）を以て業を建て，未だ嘗て輕々しく以て人に授けず，卿は其れ之を勉めよ！」

左將軍の**寶沖**（とうしゅう 続は寶衝）は曰く、
「王者は戲言無し、此れ不祥之征（続は徴）也！」

堅は默然とする。

慕容楷、慕容紹は慕容垂に謂って曰く、
「主上の驕矜は已に甚し、叔父は中興之業を建てんこと、此の行に在る也！」

垂は曰く、
「然り。汝に非ざれば、誰と與にか之を成さん！」

前秦 **〔先鋒は彭城潁口に至る〕** 甲子（8日）、堅は長安を發す、戎卒六十餘萬、騎二十七萬、旗鼓は相い望み、前後は千里。**九月**、堅は項城に至り、涼州之兵は始めて咸陽に達し、蜀、漢之兵は方に流れに順いて而して下り、幽、冀之兵は彭城に至り、東西は萬里、水陸は齊しく進み、運漕は萬艘なり。陽平公の融等兵三十萬は、先ず潁口（潁水の淮水に入る口、安徽省淮泗道潁上県、現・阜陽市潁上県）に至る。

■ **〔東晋は謝石・謝玄らを派遣して防衛〕** 詔して尚書僕射の謝石を以て征虜將軍、征討大都督と為し、徐、兗二州刺史の謝玄を以て前鋒都督と為し、輔國將軍の謝琰、西中郎將の桓伊等と與に、衆共に八萬をして之を拒ましむ。龍驤將軍の胡彬をして水軍五千を以て壽陽を援けしむ。琰は、安之子也。

■ **〔謝安の平然たる態度〕** 是の時、秦兵は既に盛んにして、都下は震え恐れる。謝玄は入りて、計を謝安に問う、安は夷然（平然）として、答えて曰く、
「已に別に旨有り。」

既に而して寂然たり。玄は敢て復た言わず、乃ち張玄をして重ねて請わ令む。（6-252p）安は遂に駕に命じて出でて山墅（田舎の別荘）に遊び、親朋は畢く集まり、（続は、玄と）與に棋を圍み墅を賭ける（別荘を賭ける）。安の棋は常に玄に劣り、是の日、玄は懼れ、便ち敵手（力相匹敵する相手。玄の意、棋の在らず）と為り而して又た勝たず。安は遂に游陟し、夜に至りて乃ち還る。桓沖は深く根本を以て憂いと為し、精銳三千を遣わして入りて京師を援けしむ。謝安は固く之を卻（続は却）けて、曰く、

「朝廷の處分は已に定まり、兵甲は闕ける無し、西籬は宜しく留めて以て防と為すべし。」

沖は佐吏（諸藩府の參佐）に對して歎いて曰く、

「謝安石は廟堂之量有れども、將略に聞せず。今大敵は至るに垂々として、方に游談するに暇あらず、諸々の事を経ざる少年（戦争に無經驗）を遣わして之を拒ましめ、衆は又た寡弱にして、天下の事は已に知る可く、吾は其れ左衽せん矣！」

■琅邪王の（司馬）道子を以て尚書六條の事を録さしむ。

前秦 **〔降將の朱序はさりげなく裏切る〕** **冬、十月**、秦の陽平公の融等は壽陽を攻める。癸酉（18日）、之に克ち、平虜將軍の徐元喜等を執る。融は其の參軍の河南の郭褒を以て淮南太守と為す。慕容垂は鄖城（湖北省江漢道安陸県、現・孝感市安陸市）を抜く。胡彬は壽陽の陷ちるを聞き、退きて硤石（山の名、安徽省淮泗道鳳臺県の西北、現・淮南市鳳台県）を保ち、融は進みて之を攻める。秦の衛將軍の梁成等は衆五萬を帥いて洛澗（川の名、安徽省淮泗道定遠県、現・滁州市定遠県）に屯し、淮に柵し以て東兵を遏む。謝石、謝玄等は洛澗を去ること二十五里而して軍し、成を憚り、敢えて進まず。胡彬は糧盡き、潜かに遣使して石等に告げて曰く、
「今賊は盛んにして、糧は盡く、恐らくは復た大軍を見ざらん！」

秦人は之を獲て、陽平公の融に送る。融は使いを馳せて秦王の堅に白して曰く、
「賊は少くして擒にし易し、但だ恐らくは逃げ去らん、宜しく速かに之に赴かん！」

堅は乃ち大軍を項城に留めて、輕騎八千を引いて、道を兼ねて融に壽陽に就く。尚書の朱序（三年に前秦に

襄陽で捕らえられて度支尚書に拝す）を遣わして來たりて謝石等を説かしめて以て為（（続は無し））す

「強弱は勢いを異にする、速かに降るに如かず。」

序は私かに石等に謂って曰く、（降將の朱序はさりげなく裏切る）

「若し秦の百萬之衆が盡く至れば、誠に與に敵と為り難し。今諸軍の未だ集まらざるに乗りて、宜しく速かに之を撃つべし。若し其の前鋒を敗れば、則ち彼は已に氣を奪われ、遂に破る可からん也。」

石は堅の壽陽に在るを聞き、甚だ懼れ、戦わずして以て秦の師を老らせんと欲す。謝琰は石に勧めて序の言に従わしむ。**十一月**、謝玄は廣陵相の劉牢之を遣わして精兵五千人を帥いて洛澗に趣かしめ、未だ至らざること十里、梁成は澗を阻て陳を為し以て之を待つ。牢之は直ちに前みて水を渡り、成を撃ち、大いに之を破り、成及び弋陽（未支配の地）太守の王詠を斬る、又た兵を分けて其の歸津を斷ち、秦の歩騎は崩れ潰え、争いて淮水に赴き、士卒の死する者は萬五千人。秦の揚州刺史の王顯等を執り、盡く其の器械軍實を收める。是に於いて謝石等の諸軍は水陸繼いで進む。（6-253p）秦王の堅は陽平公の融と與に壽陽城に登り之を望む。晉兵の部陣の嚴整たるを見、又た八公山（安徽省淮泗道鳳臺県の西北、現・淮南市鳳台県）の上の草木を望見（（続は無し））し、皆な以て晉の兵と為し、顧みて融に謂って曰く、

「此れ亦た勁（強）敵なり、何ぞ弱しと謂う也！」

憚然として始めて懼るる色有り。

前秦〔**淝水の戦い、前秦軍は自ら崩壊す**〕秦兵は肥水（淝水、安徽省淮泗道壽県と峽石の間、現・淮南市寿県）に逼りて而して陳ず、晉兵は渡るを得ず。謝玄は遣使して陽平公の融に謂って曰く、

「君の懸軍は深く入り、而して陳を置きて水に逼る、此れ乃ち持久之計なり、速かに戦わんと欲する者に非ざる也。若し陳を移して小さく卻（（続は却））き、晉の兵を渡るを得使め、以て勝負を決すれば、亦た善からず乎！」

秦の諸將は皆な曰く、

「我は衆にして彼は寡なり、之を遏め、上ることを得ざら使むに如かず、以て萬全なる可し。」

堅は曰く、

「但だ兵を引いて少しく卻け、之をして半ば渡ら使めて、我は鐵騎を以て蹙りて而して之を殺せば、勝たざる蔑し矣！」

融は亦た以て然りと為し、遂に兵を磨きて卻か使む。秦兵は遂に退き（両敵相向い、退く者は先ず敗れるは、用兵の常勢いなり）、復た止む可からず、謝玄、謝琰、桓伊等は兵を引いて水を渡りて之を撃つ。融は騎を馳せて陳を略し、以て退く者を帥いんと欲すも、馬は倒れ、晉兵の殺す所と為り、秦兵は遂に潰ゆ。玄等は勝ちに乗りて追撃し、青岡（安徽省淮泗道壽県を去る三十里）に至る。秦兵は大いに敗れ、自ら相い蹈藉し而して死する者は、野を蔽い川を塞ぐ。其の走る者は風聲鶴唳（諺となる、風音や鶴の鳴き声にも、驚き恐る）を聞き、皆な以為らく晉兵の且に至らんとすと、晝夜敢えて息まず、草行露宿（草を渡りて道に沿わない、野宿）し、重ねるに饑凍を以てし、死者は什に七、八。初め、秦兵は小しく卻き、朱序は陳後に在りて呼んで曰く、

「秦兵は敗れる矣！」

衆は遂に大いに奔る。序は因りて張天錫（前涼の元主）、徐元喜と與に皆な來奔す。秦王の堅が乗る所の雲母車（晉の制に王公以上は雲母で飾る）及び儀服器械を獲り、軍資珍寶畜産は計るに勝る可からず（（続は欠如））、復た壽陽を取り、其の淮南太守の郭褒を執る。

前秦〔**苻堅軍の崩壊**〕堅は流れ矢に中たり、單騎にして走りて淮北に至り、饑甚だしく、民の壺飧（簡単な食事、湯がけ）、豚髀を進める者有り、堅は之を食し、帛十匹、綿十斤を賜わらんとす。辭して曰く、

「陛下は安樂を厭苦し、自ら危困を取る。臣は陛下の子^た為り、陛下は臣の父^{やしな}為り、安んぞ子の其の父を飼^{やしな}い而して報を求める有らん乎？」

顧みずして而して去る。堅は張夫人に謂って曰く、

「吾は今復た何の面目ありてか天下を治める乎！」

潸然として流涕す。

前秦 【唯一健在の慕容垂は義を通す】 是の時、諸軍は皆な潰え、惟だ慕容垂の將する所の三萬人は獨り全くし、堅は千餘騎を以て之に赴く。世子の寶^{（慕容宝、のちに後燕二代皇帝）}は垂に言^すって曰く、

「家國は傾覆し、天命人心は皆な至尊に歸せり、但だ時運は未だ至らず、故に跡を晦まし自ら藏する耳。今秦主の兵は敗れ、身を我に委ねる、是れ天は之が便を借りて以て燕の祚を復さんとす、此の時を失う可からざる也、願はくは意氣微恩（堅が垂父子に礼を尽くす恩）を以て社稷之重きを忘れざらん！」

垂は曰く、

「汝の言は是也。然れども彼は赤心を以て命を我に投ず、之を若何ぞ之を害さん！天は苟くも之を棄てれば、何の亡びざるを患うるや？其の危きを保護して以て德に報い、徐ろに其の讐を俟ちて而して之を圖るに若かず！既に宿心に負かず、且つ義を以て天下を取る可し。」

奮威將軍の慕容德^{（のちに南燕主）}は曰く、（6-254p）

「秦は強く而して燕を並（続は并）せ、秦は弱く而して之を圖るは、此れ仇を報い恥^すを雪ぐと為す、宿心に負くに非ざる也。兄は奈何ぞ得て而も取らず、數萬之衆を釋^すてて以て人に授ける乎？」

垂は曰く、

「吾は昔太傅（前燕の慕容評、102 卷海西公太和四年にあり）の容れざる所と為り、身を置くに所無し、死を秦に逃るるや、秦主は國士を以て我を遇し、恩禮は備^{つがさ}に至る。後に復た王猛^{（太和五年にあり）}の賣る所と為り、以て自ら明かにする無し。秦主は獨り能く之を明らかにす、此の恩は何ぞ忘れる可き也！若し氏運必らず窮せば、吾は當に關東を懷集し、以て先業を復す耳、關西は會^{かなら}ず吾が有に非ざる也。」

冠軍行參軍の趙秋は曰く、

「明公は當に燕祚を紹復すべきこと、圖讖^{としん}に著わる。今日の時は已に至り、尚ほ復た何をか待たん！若し秦主を殺し、鄴都に據り、鼓行して而して西せば、三秦は亦た苻氏之有に非らざらん也！」

垂の親黨は多く垂の堅を殺すを勧め、垂は皆な従わず、悉く兵を以て堅に授ける。平南將軍の慕容暉は鄴城に屯し、堅の敗れるを聞き、其の衆を棄てて遁げ去る。滎陽に至り、慕容德は復た暉に説きて兵を起こして以て燕祚を復さしめんとし、暉は従わず。

■ 【謝安は下駄の齒の折れるを知らず】 謝安は驛書を得、秦兵の已に敗れるを知り、時に方に客と棋を圍む、書を攝めて床上に置き、了^{つひ}に喜色無く、棋を圍むこと故^{もと}の如し。客は之を問い、徐ろに答えて曰く、「小兒輩は遂に已に賊を破れり。」

既に罷めて、内に還り、戸限を過ぎ、屐齒（下駄の齒）之折れるを覺えず。

■ 丁亥（2日）、謝石等は建康に歸り、秦の樂工を得たり、能く舊聲に習い、是に於いて宗廟は始めて金石之樂を備える。乙未（10日）、張天錫を以て散騎常侍と為し、朱序を琅邪の内史と為す。

【慕容垂の離脱】

前秦 秦王の堅は離散を收集し、洛陽に至る比^{ころ}、衆は十餘萬あり、百官、儀物、軍容は粗^ほば備わる。

前秦 【慕容垂は祖廟を訪ねると称して離脱】 慕容農は慕容垂に謂って曰く、

「尊（父の慕容垂）は人に險に迫らず、其の義聲は以て天地を感動するに足る。農は聞く秘記に曰く、『燕は復た興らん、當に河陽に在るべし。』夫れ果を未だ熟せざると自^{おのずか}ら落ちるとに取るは、旬日之間を^{おく}晩れるに過ぎず、然るに其の難易美惡は、相い去ること遠し矣！」

垂は心に其の言を善しとし、行きて澠池^{べん}に至り、堅に言つて曰く、

「北の鄙之民は、王師利あらずと聞き、輕々しく相い扇動す、臣は請う、詔書を奉じ以て之を鎮慰安集し、因りて過ぎて陵廟（燕の祖父の祖廟）を謁せん。」

堅は之を許す。權翼は諫めて曰く、

「國兵は新たに破れ、四方は皆な離心有り、宜しく名將を徵集して、之を京師に置き、以て根本を固め、枝葉を鎮めん。垂の勇略は人に過ぎ、世々東夏に豪たり、頃^{このごろ}禍いを避けるを以て而して來たり、其の心は豈に止だ冠軍と作らんと欲する而して已む哉！譬えば鷹を養うが如し、饑えれば則ち人に附けて、每風颯之起るを聞く毎に、常に陵霄^{りょうしょう}之志（高く天に上る気持ち）有り、正に宜しく其の條（糸の繩、鷹を繋ぐ）籠を謹しむべく、豈に^{ほしいまま}縦を解きて、其の欲する所に任す可けん哉！」

堅は曰く、

「卿の言は是也。然れども朕は已に之を許したり、（6-255p）匹夫は猶ほ言を食まず、況んや萬乘を乎？若し天命廢興有れば、固より智力の能く移す所に非ざる也。」

翼は曰く、

「陛下は小信を重んじて而して社稷を輕んず、臣は其の往き而して返らざるを見、關東之亂は、此より始まらん矣。」

堅は聽かず、將軍の李蠻、閔亮、尹國を遣わして衆三千を帥いて垂を送らしむ。又た驍騎將軍の石越を遣わして精卒三千を帥いて鄴に戍せしめ、驃騎將軍の張蚝をして羽林五千を帥いて并州に戍せしめ、鎮軍將軍の毛當をして衆四千を帥いて洛陽に戍せしむ。權翼は密かに壯士を遣わして垂を河橋の南の空倉中に邀えしめ、垂は之を疑い、涼馬台（河南省河北道孟県、現・洛陽市か）より草筏（いかだ）を結びて以て渡り、典軍の程同をして己の衣を衣せ、己の馬に乗せ、僮僕と河橋に趣か使む。伏兵は發し、同は馬を馳せて免かるるを獲たり。

前秦十二月、秦王の堅は長安に至り、陽平公の融を哭して而して後に入り、謚して哀公と曰う。大赦して、事に死する者の家を復す。（その家の賦役を免ず）

■庚午（16日）、大赦す。謝石を以て尚書令と為す。謝玄の號を前將軍に進めんとし、固く讓りて受けず。

■謝安の婿の王國寶は、坦之之子也。安は其の人と為りを惡み、毎に抑えて而して用いず、以て尚書郎と為す。國寶は自ら^{おも}以えらく望族（名望ある家柄）なりと、故事に唯だ吏部と作り、餘曹と為らずと、固く辭して拜せず、是に由りて安を怨む。國寶の從妹は會稽王の道子の妃^な為り、帝は道子と皆な酒を嗜み、邪詔を狎暱（慣れ親しむ）し、國寶は乃ち安を道子に譖り、之を帝に離間せ使む。安の功名は既に盛んなり、而して險詖にして進を求める之徒は、多く安を毀短（誹りけなす）す、帝は是に由りて^{ようや}稍く之を疏忌す。

■初めて酒禁を開き、民の税米を、口ごとに五石を増す。

前秦〔呂光は西域諸國に勝つ〕秦の呂光は行きて流沙を越えること三百餘里、焉耆等の諸國は皆な降る。惟だ龜茲王の帛純は之を拒み、城に嬰りて固く守り、光は軍を進めて之を攻める。

前秦〔乞伏國仁自立へ〕秦王の堅の之入寇する也、乞伏國仁を以て前將軍と為し、先鋒の騎を領せしむ。

國仁の叔父の歩^{ほたい}顏の隴西に反すに會して、堅は國仁（前卷前年に司繁に代わりて勇士に鎮す）を遣わして還りて之を討たしむ。歩顏は之を聞き、大いに喜び、國仁を路に迎える。國仁は酒を置きて、大言して曰く、「苻氏は民を疲らせ兵を逞しくし、殆んど將に亡びんとし矣、吾は當に諸君と共に一方之業を建つべし。」堅の敗れるに及びて、國仁は遂に諸部を迫脅し、従わざる者有れば、撃ちて而して之を並（続は併）せ、衆は十餘萬に至る。

【慕容垂自立への動き】

前秦 **〔鄴に帰還した慕容垂と苻丕の緊張関係〕**慕容垂は安陽（鄴城の西南、河南省河北道安陽県、現・安陽市）に至り、參軍の田山を遣わして箋を長樂公の丕^{おさ}に修む。丕は垂の北に來たるを聞き、其の亂を為さんと欲するを疑う、然れども猶ほ身自ら之を迎える。趙秋は垂に勧めて、「座に於いて丕を取り、因りて鄴に據りて兵を起こせ」

垂は従わず。丕は垂を襲撃せんと謀り、侍郎（晉の制では王国に二侍郎を置く）の天水の姜讓は諫めて曰く、（6-256p）

「垂の反形は未だ著^{あら}われず、而るに明公が之を擅殺すれば、臣子之義に非らず。如かず、待つに上賓之禮を以てし、嚴兵して之を衛り、密かに情狀を表し、敕を聽きて而る後に之を圖るべし。」

丕は之に従い、垂を鄴西に館す。

前秦 **〔丕は双虎相戦わせるために慕容垂を翟斌討伐に向ける〕**垂は潜かに燕之故臣と燕の祚を復さんと謀り、曾^{たまた}々丁零（元々中山におり、苻堅が燕を滅ぼすと新安に抛る）の翟斌^{てきひん}（秦に事え、衛軍從事中郎となる）が兵を起こして秦に叛し、豫州牧の平原公の暉を洛陽に攻めんと謀る。秦王の堅は驛書をもって垂に兵を將いて之を討たしめんとす。石越は丕に言つて曰く、

「王師は新たに敗れ、民心は未だ安ぜず、罪を負いて亡げ匿れる之徒は、亂を思ふ者衆く、故に丁零がたび唱えれば、旬日之中に、衆は已に數千なり、此れは其の驗也。慕容垂は、燕之宿望にして、舊業を興復する之心有り。今復た之に資するに兵を以てすれば、此れは虎の為に翼を傳くる也。」

丕は曰く、

「垂の鄴に在るは、虎を藉^{しきもの}にして蛟^{みづち}（大きな毒蛇）に寝るが如し、常に恐らくは肘腋（身近）之變を為さん。今之を外に遠ざけるは、猶ほ愈^{もさ}らず乎！且つ翟斌は凶悖にして、必ず垂の下と為るを肯ぜず、兩虎をして相い斃れしめ、吾は従い而して之を制すれば、此れ卞莊子（《史記張儀列傳》卞莊子は老虎を刺さんとし、「兩虎に戦わせ、大は必ず傷つき、小は必ず亡び、然る後に傷ついた老虎を刺し殺す、一舉に双虎を獲る。）之術也。」

乃ち羸兵二千及び鎧仗^{やぶ}之弊れたる者を以て垂に給し、又た廣武將軍の苻飛龍を遣わして氐騎一千を帥いて垂之副と為し、密かに飛龍を戒めて曰く、

「垂は三軍之帥^な為り、卿は垂を謀る之將^な為り、行け矣、之を勉めよ！」

前秦 **〔丕は垂を追い込めず〕**垂は鄴城に入りて廟（燕は都して廟有り）を拜すを請い、丕は許さず、乃ち潜服（微服）して而して入る。亭吏は之を禁じ、垂は怒り、吏を斬り亭を焼きて而して去る。石越は丕に言つて曰く、

「垂は敢えて方鎮を輕侮し、吏を斬り亭を焼きて、反形は已に露われ、此れに因りて之を除く可し。」

丕は曰く、

「淮南之敗れるに、垂は（苻堅の）乘輿に侍衛す、此の功は忘る可からず也。」

越は曰く、

「垂は尚ほ燕にすら忠ならず、安んぞ能く忠を我に盡くすや？今を失いて取らざれば、必ず後患と為らん。」

丕は従わず。越は退き、人に告げて曰く、

「公父子は好みて小仁を為し、大計を顧みず、終に當に人の擒と為る耳。」

前秦 **〔垂は怒りて、募兵〕**垂は慕容農、慕容楷、慕容紹を鄴に留め、行きて安陽之湯池に至る。閔亮、李毘は鄴より來たり、丕が苻飛龍と謀る所を以て垂に告げる。垂は因りて其の衆を激怒して曰く、

「吾は忠を苻氏に盡くす、而るに彼は専ら吾が父子を圖らんと欲す、吾は已めんと欲すと雖も、得ん乎！」乃ち言を兵の少きに託して、河内に停まりて兵を募り、旬日の間に、衆八千有り。

前秦 **〔垂は苻飛龍を殺害〕**平原公の暉は遣使して垂を讓め、趣きて兵を進め使む。垂は飛龍に謂って曰く、

「今寇賊は遠からず（河内は新安・洛陽を黄河を隔てるのみの近さ）、當に晝止まりて夜行き、其の不意を襲うべし。」飛龍は以て然ると為す。壬午（28日）、夜、垂は世子の寶を遣わして兵を將いて前に居らしめ、少子の隆をして兵を勸して己に従わしめ、氐の兵に令して五人を伍と為さしむ。陰かに寶と約し、鼓聲を聞き、前後より氐の兵及び飛龍を合撃し、盡く之を殺し、參佐の家の西に在る者は皆な遣りて還し、並（続は并）に書を以て秦王の堅に遣り、飛龍を殺す所以之故（丕が苻飛龍と謀る）を言う。（6-257p）

前秦 **〔麟の画策と優遇〕**初め、垂は堅に従いて鄴に入るや（102 卷海西公太和五年）、其の子の麟（慕容宝の庶兄。のち宝が薨に逃れた際、中山で燕帝を僭称）は屢々嘗て變を燕に告げしむ（太和四年にあり）を以て、立ちどころに其の母を殺せり。然れども猶ほ麟を殺すを忍びず、之を外捨（続は舍）に置き、侍見するを得る希なり。苻飛龍を殺すに及びて、麟は屢々策畫を進め、垂の意を啟發（垂の意を汲んでさらに先回りして）し、垂は更に之を奇として、寵待すること諸子と均しき矣。

前秦慕容鳳及び燕の故臣之子の燕郡の王騰、遼西の段延（段氏の族）等は翟斌の兵を起てるを聞き、各々部曲を帥いて之に歸す。平原公の暉は武平の武侯の毛當をして斌を討た使む。慕容鳳は曰く、

「鳳は今に先王之恥（燕の滅ぶるに父の桓は難に死す、102 卷海西公太和二年）を雪がんとす、請う將軍（続は無し）の為に此の氐奴を斬らん。」

乃ち甲を撰つらぬきて直ちに進み、丁零之衆は之に隨い、大いに秦兵を敗り、毛當を斬る。遂に進みて陵雲台（魏の文帝の築く、洛陽の西）の戍を攻め、之に克ち、萬餘人の甲仗を收める。

前秦 **〔慕容垂の挙兵〕**癸未（29日）、慕容垂は河を濟りて橋を焚き、衆三萬有り、遼東鮮卑の可足の渾潭を留めて兵を河内之沙城（河南省河北道河内県）に集めしむ。垂は田山（晉書載記には田生）を遣わして鄴に如き、密かに慕容農等に告げしめて兵を起こして相い應ぜ使む。時に日は已に暮れ、農は慕容楷と與に留まりて鄴中に宿す。慕容紹は先ず出でて、蒲池（鄴城の外にあり）に至り、丕の駿馬數百匹を盗んで以て農、楷を待つ。甲申（30日）晦、農、楷は數十騎を將いて微服して鄴を出、遂に同じく列人（鄴城の東北の県、直隸省大名道肥郷県、現・河北省邯鄲市肥郷区）に奔る。

烈宗孝武皇帝上之下太元九年（甲申，384年）

前秦 **〔丕は慕容農の逃亡を知る〕**春，正月，乙酉（1日）朔，秦の長樂公の丕は大いに賓客に會して、慕容農を請えども得ず、始めて變有るを覺る。人を遣わして四ほうに出でて之を求めること、三日にして、

乃ち其の列人（鄴城より東北の県、直隸省大名道肥郷県、現・邯鄲市肥郷区）に在りて、已に兵を起こすを知る矣。

前秦 **〔翟斌はついに慕容垂に就く〕**慕容鳳、王騰、段延は皆な翟斌に勧めて慕容垂を奉じて盟主と為さんとす。斌は之に従う。垂は洛陽を襲わんと欲し、且つ未だ斌之誠偽を知らず、乃ち之を拒んで曰く、

「吾は來たりて豫州（平原公の暉は豫州牧で洛陽に鎮す）を救い、來たりて君に赴かず。君は既に大事を建て、成れば其の福を享け、敗れば其の禍いを受け、吾は焉に預かる無し。」

丙戌（2日）、垂は洛陽に至り、平原公の暉は其の苻飛龍を殺すを聞き、閉門して之を拒む。翟斌は復た長史の郭通を遣わして往きて垂を説かしめ、垂は猶ほ未だ許さず。通は曰く、

「將軍の通を拒む所以の者は、豈に翟斌の兄弟の山野の異類にして、奇才遠略無く、必ず成す所無しを以てする故に非ず邪？獨り將軍今日之（翟斌）に憑れば、以て大業を濟す可きを念わず乎！」

垂は乃ち之を許す。是に於いて斌は其の衆を帥いて來たりて垂と會し、垂に勧めて尊號を稱せしむ。垂は曰く、

「新興侯（慕容暉、長安の苻堅にあり）は、吾が主也、當に迎え歸りて正に返すべき耳。」

【慕容垂の即位、後燕建国】

▲ **〔慕容垂の即位、後燕成立〕**垂は洛陽の四面に敵を受けるを以て、鄴を取りて而して之に據らんと欲し、(6-258p) 乃ち兵を引いて而して東す。故の扶餘王の餘蔚（太和五年に鄴の北門を開き秦兵を入れる者）は滎陽太守たみ為り、及び昌黎の鮮卑の衛駒は各々其の衆を帥いて垂に降る。垂は滎陽に至り、群下は固く尊號を上らんと請い、垂は乃ち晉の中宗の故事（晉の元帝の廟号。元帝が王と称し制を承けること 90 卷建武元年にあり）に依りて、大將軍、大都督、燕王を稱し、製（族は制）を承けて事を行い、之を統府と謂う。群下は臣と稱し、文表奏誥（族は疏）し、官爵を封拜すること、皆な王者の如し。弟の徳を以て車騎大將軍と為し、范陽王（前燕時代のまゝに戻す）に封ず。兄の子の楷を征西大將軍と為し、太原王（父の恪の爵を継がしむ）に封ず。翟斌を建義大將軍と為し、河南王に封ず。餘蔚を征東將軍、統府の左司馬と為し、扶餘王に封ず。衛駒を鷹揚將軍と為し、慕容鳳を建策將軍（一時期垂が署置す）と為す。衆二十餘萬を帥いて、石門より河を濟りて、長驅して鄴に向かう。

▲ **〔慕容農の軍は烏桓などを併合して巨大化〕**慕容農之列人に奔る也、烏桓の魯利の家に止まり、利は之が為に饌を置き、農は笑いて而して食せず。利は其の妻に謂って曰く、

「惡奴（その妻に戯れて罵するの辭）、郎は貴人なり、家貧しく以て之に饌する無し、奈何せん？」

妻は曰く、

「郎は雄才大志有り、今は故無くして而して至るは、必ず將に異有らんとす、飲食の為に來たるに非ざる也。君は亟すみやかに出で、遠望して以て非常に備えよ。」

利は之に従う。農は利に謂って曰く、

「吾は兵を列人に集めて以て興復を圖らんと欲す、卿は能く我に従う乎？」

利は曰く、

「死生は唯だ郎に是れ従わん。」

農は乃ち烏桓の張驤に詣り、之に説きて曰く、

「家王は已に大事を挙げ、翟斌等は鹹な相い推奉し、遠近は響應し、故に來たりて相い告ぐ耳。」

驤は再拜して曰く、

「舊主を得て而して之を奉じる、敢えて死を盡くさざらん！」

是に於いて**農**は列人の居民を驅りて士卒と為し、桑榆を斬りて兵（武器）と為し、襜褕（膝掛け）を裂きて旗と為し、**趙秋**をして屠各の畢聰を説か使む。**聰**は屠各のト勝、張延、李白、郭超及び東夷の餘和、敕勒（統は勃）、易陽（直隸省大名道永年県、現・邯鄲市永年区）の烏桓の**劉大**と各々部衆數千を帥いて之に赴く。**農**は張驤に輔國將軍を、**劉大**に安遠將軍を、**魯利**に建威將軍を假す。**農**は自ら將して攻めて館陶（山東省東臨道館陶県、現・河北省邯鄲市館陶県）を破り、其の軍資器械を收め、**蘭汗**（のちに慕容宝を殺す）、**段贊**、**趙秋**、**慕輿忸**を遣わして康台（沢の名、永年県の境）の牧馬數千匹を略取す。**汗**は、燕王の垂之從舅なり。**贊**は、**聰**之子也。是に於いて歩騎は雲集し、衆は數萬に至り、**驤**等は共に**農**を推して使持節、都督河北諸軍事、驃騎大將軍と為し、諸將を監統せしめ、才に隨いて部署し、上下は肅然とす。**農**は燕王の垂の未だ至らざるを以て、敢えて將士に封賞せず。**趙秋**は曰く、

「軍に賞無ければ、士は往かず。今之來たる者は、皆な一時之功を建て、萬世之利を規らんと欲す、宜しく製を承けて封拜し、以て中興之基を廣げるべし。」

農は之に従い、是に於いて赴く者は相い繼ぐ。垂は聞きて而して之を善しとする。**農**は間（統による、西×）に庫辱官偉を上黨より招き、東して乞特歸を東阿より引き、北して光烈將軍の平睿及び（6-259p）睿の兄の汝陽太守の幼を燕國に召く。**偉**等（みな燕の旧臣）は皆な之に應じる。又た**蘭汗**等を遣わして頓丘（直隸省大名道清豐県、現・河南省濮陽市清豐県）を攻めしめ、之に克つ。**農**の號令は整肅にして、軍に私掠無く、士女は喜悅する。

▲ 慕容農と前秦の驍將石越 長樂公の丕は石越をして歩騎萬餘を將いて之を討た使む。**農**は曰く、

「**越**は智勇之名有り、今は南して大軍を拒がず而して此に來たるは、是れ王（慕容垂）を畏れて而して我を陵る也。必ず備えを設けず、計を以て之を取る可し。」

衆は列人城を治めんと請い、**農**は曰く、

「善く用兵する者は、士を結ぶに心を以てし、異物（他の物）を以てせず。義兵を起こし、唯だ敵を是れ求め、當に山河を以て城池と為すべし、何ぞ列人之治むるに足る也！」

辛卯（7日）、**越**は列人の西に至り、**農**は**趙秋**及び參軍の慕容暕をして**越**の前鋒を撃た使め、之を破る。參軍の太原の**趙謙**は**農**に謂って曰く、

「**越**の甲仗は精なりと雖も、人心は危駭し、破るに易き也、宜しく急に之を撃たん。」

農は曰く、

「彼の甲は外に在り、我の甲は心に在り（士心闘わんとするに、甲冑無くとも勇ましい）、晝戦えば、則ち士卒は其の外貌を見て而して之を憚からん、暮を待ちて之を撃つに如かず、以て必ず克つ可し。」

軍士に令して備えを嚴かにして以て待ち、妄りに動くを得る母からしむ。**越**は柵を立てて自ら固め、**農**は笑いて諸將に謂って曰く、

「**越**は兵は精にして士は衆く、初め至る之銳に乗じて以て我を撃たず、方に更に柵を立て、吾は其の能く為す無きを知る也。」

暮に向い、**農**は鼓噪して出で、城西に陳ず。牙門の**劉木**は先ず**越**の柵を攻めんと請い、**農**は笑いて曰く、

「凡そ人は美食を見れば、誰か之を欲せざらん、何ぞ獨り請うを得ん！然れども汝の猛銳は嘉しとす可し、當に先鋒を以て汝に恵むべし。」

木は乃ち壯士四百を帥いて柵に騰り而して入り、秦兵は披靡す。**農**は大衆を督して之に隨い、大いに秦兵を敗り、**越**を斬り、首を垂に送る。**越**は毛當と、皆な秦之驍將也、故に秦王の堅は二子を助けて鎮守せ使む。既に而して相い繼いで敗没し、人情は騒動し、所在には盜賊が群がり起こる。

▲〔燕は一族を王公に任命〕 庚戌（26日）、燕王の垂は鄴に至り、秦の建元二十年を改めて燕の元年と為し、服色朝儀は、皆な舊章の如し。前（前燕）の岷山公の庫辱官偉を以て左長史と為し、前（続による、肖x）の尚書の段崇を右長史と為し、滎陽の鄭豁等を從事中郎と為す。慕容農は兵を引いて鄴に於いて垂に會し、垂は其の稱する所之官（張驥等が推す所の官）に因り而して之を授ける。世子の寶を立てて太子と為し、從弟の拔等十七人及び甥の宇文輸、舅の子の蘭審を封じて皆な王と為す。其餘の宗族及び功臣の公に封ぜられる者は三十七人、侯、伯、子、男なる者は八十九人。可足渾譚は（沙州の徴兵の結果）兵を集めて二萬餘人を得、野王を攻めて、之を抜き、兵を引いて會して鄴を攻める。平幼及び弟の睿、規亦た衆數萬を帥いて垂に鄴に會す。

▲長樂公の丕は姜讓をして燕王の垂を誚讓（誹り責める）し、且つ之を説きて曰わ使む、
「^{あや}過まちて而して能く改めるは、今猶ほ未だ晩からず也。」

垂は曰く、

「孤は主上不世之恩を受け、故に長樂公を安全にし、（6-260p）衆を盡くして京師（長安）に赴か使めて、然る後に國家之業を修復し、秦と永く鄰好を為さんと欲す。何が故に機運に暗（続は闇）く、鄴城を以て歸され見れざるや？若し迷いて而して復せざれば、當に兵勢を窮極し、恐らくは單馬にて生を求めるも、亦た得可からん也。」

讓は厲色して之を責めて曰く、

「將軍（慕容垂）は家國（前燕）に容れられず、命を聖朝（前秦）に投げ、燕之尺土は、將軍豈に分有らん乎？主上（苻堅）は將軍と風（俗）殊なり類別（諸族が別）にして、一見して心を傾け、親しんで宗戚の如く、寵は勳舊を逾えたり、古より君臣の際遇は、是くの如き之厚き者有る乎？一旦は王師が小しく敗るるに因り、^{にわか}遽に異圖有り。長樂公は、主上の元子にして、分陝之任（周公・召公の如き重任、陝を境とす）を受け、^{なん}寧ぞ手を束ねて將軍に輸すに百城之地を以てす可けん乎？將軍は冠を裂きて冕を毀さん（左傳の引用）と欲せば、自ら其の兵勢を極む可し、^{なん}奚ぞ更に云云せんや！但だ惜しむらくは將軍が七十之年を以て、首を白旗に懸け（武王は紂の首を斬りて太白の旗に懸ける）、高世之忠、更に逆鬼と為らん耳！」

垂は默然とす。左右は之を殺さんと請い、垂は曰く、

「彼は各々其の主の為にする耳、何の罪あるや！」

禮して而して之を歸し、丕に書を遣り及び秦王の^{たてまつ}堅に表を上り、利害を陳述し、丕を送りて長安に歸さんと請う。堅及び丕は怒り、復書して之を切責す。

■〔桓沖らは秦の諸城を攻める〕 鷹揚將軍の劉牢之は秦の譙城を攻め、之を抜く。桓沖は上庸太守の郭寶を遣わして秦の魏興、上庸、新城の三郡を攻め、之を抜く。將軍の楊佺期は進めて成固に據り、秦の梁州刺史の潘猛を撃ちて、之を走らす。佺期は、亮（前卷太元二年にあり）之子也。

▲〔慕容垂は鄴を攻める〕 壬子（28日）、燕王の垂は鄴を攻め、其の外郭を抜き、長樂公の丕は退きて中城を守る。關東六州の郡縣は多く任を送りて燕に降を請う。癸丑（29日）、垂は陳留王の紹を以て冀州刺史に行き、廣阿（直隸省大名道隆平県、現・河北省邢台市隆堯県）に屯せしむ。

■〔桓沖は前言を悔いて悶死〕 豊城の宣穆公の桓沖は謝玄等の功有るを聞き、自ら以えらく言を失う（前年の「吾は其れ左衽せん」の言）とし、慚恨して疾と成る。二月、辛巳（17日）、卒す。朝議は謝玄を以て荊、江二州刺史と為さんと欲す。謝安は自ら父子の名位は太いに盛なりと以い、又た桓氏が失職して怨望せんとするを懼れ、乃ち梁郡太守の桓石民を以て荊州刺史と為し、河東太守の桓石虔を豫州刺史と為し、

豫州刺史の桓伊を江州刺史と為す。

【慕容垂の勢力拡大】

▲ **「慕容垂は鄴を包囲」** 燕王の垂は丁零、烏桓之衆二十餘萬を引いて飛梯（高い攻城用の梯子）地道（地下道）を為^{つづ}りて以て鄴を攻め、拔かず。乃ち長圍を築いて之を守り、老弱を肥郷（直隸省大名道肥郷県、現・河北省邯鄲市肥郷区）に分處して、新興城を築き以て輜重を置く。（6-261p）

前秦 **「高泰は君子」** 秦の征東府（丕の征東大將軍の府）の官屬は參軍の高泰（高句麗関係か）が、燕之舊臣にして、貳心有るを疑う。泰は懼れ、同郡の虞曹從事（府の所部の山澤を掌る）の吳韶と逃げて勃海に歸る。韶は曰く、「燕軍は近く、肥郷に在り、宜しく之に従うべし。」

泰は曰く、

「吾は以て禍いを避ける耳。一君去りて、一君に事えるは、吾が為さざる所也！」

申紹は見て而して歎じて曰く、

「去就するに道を以てす、君子と謂う可きかな矣！」

▲ 燕の范陽王の德は秦の枋頭を撃ちて、之を取り、戍を置いて而して還る。

▲ **「慕容楷、紹は鮮卑、烏桓及び塢民を自陣營に組み込む」** 東胡の王晏は館陶（山東省東臨道館陶県、邯鄲市館陶県）に據り、鄴中の聲援と為し、鮮卑、烏桓及び郡縣の民は塢壁に據り燕に従わざる者尚ほ衆し。燕王の垂は太原王の楷を遣わして鎮南將軍の陳留王の紹と之を討たしむ。楷は紹に謂って曰く、

「鮮卑、烏桓及び冀州之民は、本より皆な燕の臣なり。今大業は始爾（日浅し）にして、人心は未だ洽^{あまね}かず、小しく異なる所以なり。唯だ宜しく之を綏^{やす}んずるに徳を以てすべし、之を震わすに威を以てす可からず。吾は當に一處に止まり、軍聲之本と為すべし。汝は民夷を巡撫し、以て大義を示せば、彼は必ず當に聽從すべし。」

楷は乃ち辟陽（直隸省大名道冀県の東南、現・衡水市冀州区）に屯す。紹は騎數百を帥いて往きて王晏を説き、為に禍福を陳べ、晏は紹に隨いて楷に詣りて降り、是に於いて鮮卑、烏桓及び塢民の降る者は數十萬口あり。楷は其の老弱を留めて、守宰を置き以て之を撫で、其の丁壯十餘萬を發し、王晏と鄴に詣る。垂は大いに悦び、曰く、

「汝ら兄弟は才は文武を兼ね、以て先王（慕容恪）を繼ぐに足れり矣！」

■ **三月**，衛將軍の謝安を以て太保と為す。

【西燕自立への道】

前秦 **「慕容泓も鮮卑を糾合して自立を計る」** 秦の北地長史の慕容泓は燕王の垂の鄴を攻めるを聞き、亡げて關東に奔り、鮮卑を收集し、衆は數千に至る。還りて華陰に屯し、秦の將軍の強永を敗り、其の衆は遂に盛んなり。自ら稱して都督陝西諸軍事、大將軍、雍州牧、濟北王とし、垂を推して丞相、都督陝東諸軍事、領大司馬、冀州牧、吳王と為す。

秦王の堅は權翼に謂って曰く、

「卿の言（權翼の慕容垂を遣るなの言）を用いず、鮮卑をして此に至ら使む。關東之地は、吾は復た之（慕容垂）と爭はず、將に泓^{いかん}を若何せんや？」

乃ち廣平公の熙を以て雍州刺史と為し、蒲阪に鎮ぜしむ。雍州の牧の巨鹿公の睿を征（統は徴）して都督中外諸軍事、衛大將軍、錄尚書事と為し、兵五萬を配す。左將軍の竇冲^{とうしゅう}（統は竇衡）を以て長史と為し、龍驤

將軍の姚萇を司馬と為し、以て泓を討たしむ。

▲【慕容冲も兵を起こす】平陽太守の慕容冲も亦た兵を平陽に起こして、衆二萬有り、進みて蒲阪を攻める。堅は竇冲（をして之を討たしむ）。

▲庫辱官偉は營部の數萬を帥いて鄴に至り、燕王の垂は偉を封じて安定王と為す。

前秦▲【苻堅と慕容垂のせめぎ合い】秦の冀州刺史の阜城侯の定は信都を守り、高城（渤海郡の県、直隸省津海道鹽山県、現・河北省滄州市鹽山県）の男紹は其の國に在り、高邑侯の亮、重合侯の謨は常山を守り、固安侯の鑒は中山を守る。燕王の垂は前將軍、樂浪王の溫を遣わして諸軍を督して信都を攻めしめ、（6-262p）克たず。夏，四月，丙辰（3日），撫軍大將軍の麟を遣わして兵を將いて之を助けしむ。定、鑒は、秦王の堅之從叔、紹、謨は、從弟、亮は、從子也。溫は、燕王の垂之弟子也。

前秦【慕容泓は關東に奔らんとする】慕容泓は秦兵の且に至らんと聞き、懼れ、衆を帥いて將に關東に奔らんとす。秦の巨鹿の愍公の睿は粗猛にして敵を輕んじ、兵を馳せて之を邀へんと欲す。姚萇は諫めて曰く、

「鮮卑は皆な歸るを思う之志有り、故に起こりて而して亂を為す、宜しく驅りて關を出で令むべし、遏む可からざる也。夫れ鼯鼠（けいそ 二十日鼠）之尾を執るすら、猶ほ能く反りて人を噬む。彼は自ら困窮を知り、死を我に致さん。萬一にも利を失えば、悔いて將に何んぞ及ばん！但だ鼓を鳴らして之に隨う可し、彼は將に奔敗するに暇有らざらんとす矣。」

【姚萇は自立して後秦を立つ】

前秦 後秦【姚萇は逃亡して自立して後秦を立てる】睿は從わず、華澤（華陰の澤）に戦い、睿の兵は敗れ、泓の殺す所と為る。萇は龍驤長史の趙都、參軍の姜協を遣わして秦王の堅に詣りて謝罪せしむ。堅は怒り、之を殺す。萇は懼れ、渭北の馬牧（馬の牧場）に奔る。是に於いて天水の尹緯、尹詳、南安（隴による）の龐演等は羌豪を糾扇（糾合扇動）し、其の戸口を帥いて萇に歸する者は五萬餘家、萇を推して盟主と為す。萇は自ら大將軍、大單于、萬年秦王と稱し、大赦し、改元して白雀とし、尹詳、龐演を以て左、右長史と為し、南安の姚晃及び尹緯を左、右司馬と為し、天水の狄伯支等を從事中郎と為し、羌訓等を掾屬と為し、王據等を參軍と為し、王欽盧、姚方成等を將帥と為す。

【慕容暉の意で西燕立つ】

西燕【慕容暉は慕容泓に託し、西燕成立】秦の竇衝は慕容冲を河東に撃ち、大いに之を破る。冲は鮮卑の騎八千を帥いて慕容泓に奔る。泓の衆は十餘萬に至り、遣使して秦王の堅に謂って曰く、

「吳王（慕容垂）は已に關東を定む、速かに大駕を資備し、家兄皇帝（慕容暉）を奉送す可し、泓は當に關中の燕人を帥いて乘輿を翼衛し、還りて鄴都に返すべく、秦と虎牢を以て界と為し、永く鄰好を為さん。」堅は大いに怒り、慕容暉を召して之を責めて曰く、

「今泓の書は此くの如し、卿は去らんと欲する者ならば、朕は當に相い資すべし。卿之宗族は、人面獸心と謂う可し、國土を以て期す可からざる也！」

暉は叩頭して流血し、涕泣して陳謝す。堅は之を久しくして曰く、

「此れ自ら三豎（慕容垂・泓・冲）の為す所、卿之過ちに非ず。」

其の位に復し、之に待すこと初めの如し。暉に命じて書を以て泓、冲及び垂を招諭せしむ。暉は密かに使いを遣わして泓に謂って曰く、

「吾は籠の中の之人なり、必ず還る理無し。且つ燕室之罪人（燕の社稷を保てずを以て、自ら罪人という）也、復た顧みるに足らず。汝は勉めて大業を建てよ、吳王を以て相國と為し、中山王を太宰と為し、大司馬を領せしめ、汝は大將軍と為り、司徒を領し、製（続は制）を承けて封拜す可し、吾が死間を聽かば、汝は便ち尊位に即くべし。」

泓は是に於いて進みて長安に向かい、改元して燕興とす。

▲ **【垂は鄴城を水攻め、逆襲される】** 燕王の垂は鄴城の猶ほ固きを以て、僚佐を會して之を議す。右司馬の封衡は漳水を引きて之に灌がんと請う。之に従う。垂は行きて圍み、因りて華林園（洛陽・鄴にあり、鄴のは魏武が築く）に飲む、秦人は密かに兵を出して之を掩い、矢は下りて雨の如く、垂は幾んど出づるを得ず、冠軍大將軍の隆は騎を將いて之を沖（続は衝）き、垂は僅かに而して免かるるを得る。（6-263p）

■ 竟陵太守の趙統は襄陽を攻め、秦の荊州刺史の都貴は魯陽に奔る。

■ **五月**、秦の洛州刺史の張五虎は豐陽に據り來たりて降る。

■ **【蜀に於ける前秦と東晋の攻防】** 梁州刺史の楊亮は衆五萬を帥いて蜀を伐ち、巴西太守の費統等を遣わして水陸の兵三萬を將して前鋒と為す。亮は巴郡に屯し、秦の益州刺史の王廣は巴西太守の康回等を遣わして之を拒む。

前秦 秦の苻定（信都を以て降る）、苻紹（高城を以て降る）は皆な燕に降り、燕の慕容麟は兵を引いて西に常山を（苻護が守る、後の慕容熙の皇后と姉の父親、後に慕容宝時代に中山尹）攻める。

後秦 **【後秦は前秦を蚕食す】** 後秦王（前秦と區別して後秦と為す）の苻は進みて北地に屯し、秦の華陰、北地、新平、安定の羌胡の之に降る者は十餘萬。

■ **六月**、癸丑（1日）朔、崇德太后の褚氏は崩ず。

【苻堅の前秦は蚕食される】

前秦 **【苻堅は後秦の包囲を極めれず、天も賊を助ける】** 秦王の堅は自ら歩騎二萬を帥いて以て後秦を撃ち、趙氏塢（陝西省關中道耀縣、現・銅川市耀州区）に軍し、護軍將軍の楊壁等をして分道して之を攻め使む。後秦の兵は屢々敗れ、後秦王の苻之弟の鎮軍將軍の尹買を斬る。後秦の軍中に井無く、秦人は安公谷を塞ぎ、同官水（陝西省關中道同官県、現・銅川市印台区）を堰きとめて以て之を困（続による、固×）しめる。後秦人は恟懼し、渴死者有り。會々天は大雨し、後秦の營中は水三尺、營を繞る百歩之外は、寸餘而して已み、後秦軍は復た振う。秦王の堅は歎じて曰く、

「天も亦た賊を佑ける乎！」

西燕 **【慕容泓殺され、慕容冲立つ】** 慕容泓の謀臣の高蓋等は泓の徳望の慕容冲に如かずを以て、且つ法を持すること苛峻なりと、乃ち泓を殺し、冲を立てて皇太弟と為し、製（続は制）を承けて事を行い、百官を置く。蓋を以て尚書令と為す。後秦王の苻は其の子の嵩を遣わして冲の質と為し以て和を請う。

■ 將軍の劉春は魯陽を攻め、都貴は奔りて長安に還る。

後秦 **【後秦は前秦を攻撃】** 後秦王の苻は衆七萬を帥いて秦を撃ち、秦王の堅は楊壁等を遣わして之を拒み、苻の敗る所と為る。楊壁及び右將軍の徐成、鎮軍將軍の毛盛等將吏數十人を獲り、苻は皆な禮し而して之を遣る。

▲ **【後燕はほぼ冀州を制覇する】** 燕の慕容麟は常山を撥し、秦の苻亮、苻護は皆な降る。（冀州は鄴の丕のみ残る）麟は進みて中山を圍み、**秋、七月**、之に克ち、苻璽を執る。麟の威聲は大いに振い、留まりて中山に屯す。

▲秦の幽州刺史の王永、平州刺史の苻冲は二州之衆を帥いて以て燕を撃つ。燕王の垂は寧朔將軍の平規（平幼の弟で、苻洛と反する平規とは別人）を遣わして永を撃たしむ。永は昌黎太守の宋敞を遣わして逆えて范陽に戦わしめ、敞の兵は敗れ、規は進みて薊南に據る。

前秦 **[秦は洛陽撤退]** 秦の平原公の暉は洛陽、陝城之衆七萬を帥いて長安に歸る。(6-264p)

前秦 益州刺史の王廣は將軍の王虓を遣わして蜀漢之衆三萬を帥いて北に長安を救わしむ。(続に記載無し)

前秦 **[慕容冲は長安に迫る]** 秦王の堅は慕容冲が長安を去ること浸く近きを聞き、乃ち兵を引いて歸り、撫軍大將軍の高陽公(続は無し)の方を遣わして驪山(長安東方)に戍せしめ、平原公の暉を拜して都督中外諸軍事、車騎大將軍と為し、尚書の事を録さしめ、兵五萬を配して以て冲を拒ましむ。冲は暉と鄭西に戦い、大いに之を破り。堅は又た前將軍の姜宇と少子の河間公の琳を遣わして衆三萬を帥いて冲を灊上に拒ましむ。琳、宇は皆な敗死し、冲は遂に阿房城(秦始皇帝の築く宮城)に據る。

前秦 秦の康回の兵は數々敗れ、退きて成都に還る。■梓潼太守の壘襲は涪城を以て來たり降る。

■ **[晉は襄河より洛陽に進出]** 荊州刺史の桓石民は魯陽に據り、河南太守の高茂を遣わして北に洛陽に戍せしむ。(苻暉が洛陽から長安に撤退した空白を突く)

■己酉(28日)、康獻皇后を崇平陵に葬す。

▲ **[翟斌に二心あり、垂は放置]** 燕の翟斌は功を恃みて驕縦にして、邀え求めること厭く無し。又た鄴城の久しく下らざるを以て、潜かに貳心有り。太子の寶は之を除かんと請い、燕王の垂は曰く、

「河南之盟は(垂と翟斌は河南県にて結んだ)、負く可からず也。若し其れ難を為せば、罪は斌に由るべし。今事は未だ形有らず而して之を殺すは、人は必ず我が其の機能を忌憚すと謂う。吾は方に豪傑を收攬し以て大業を隆んにせんとす。人に示すに狹(度量の狭小)を以てし、天下之望を失う可からざる也。藉え彼に謀有るとも、吾は智を以て之を防ぎ、能く為す無からん。」

▲ **[翟斌の反乱鎮圧、翟真的逃亡]** 范陽王の德、陳留王の紹、驃騎大將軍の農は皆な曰く、

「翟斌兄弟は功を恃んで而して驕り、必ず國の患いと為らん。」

垂は曰く、

「驕れば則ち速く敗れん、焉んぞ能く患いと為らん？彼は大功有り、當に其の自ら斃れるに聽す耳。」禮遇すること彌々重し。

斌は丁零及び其の黨に諷し斌を尚書令と為すを請わしむ。垂は曰く、

「翟王之功は、宜しく上輔に居るべし。但だ台は既に未だ建たず、此の官は遽かに置く可からざる耳。」

斌は怒(続、努×)り、密かに前秦の長樂公の丕と通謀し、丁零をして堤(鄴の水攻めの堤)を決し水を潰さしめんとす。事は覺われ、垂は斌及び其の弟の檀、敏を殺し、餘は皆な之を赦す。斌の兄の子の真是、夜營衆を將いて北に邯鄲に奔り、兵を引いて還りて鄴の圍みに向かい、丕と内外相い應じんと欲す。太子の寶は冠軍大將軍の隆と撃ちて之を破り、真是は還りて邯鄲に走る。

▲太原王の楷、陳留王の紹は垂に言つて曰く、

「丁零は大志有るに非ず、但だ寵過ぎて亂を為す耳。今之を急にすれば則ち屯聚して寇を為さん、之を緩めれば則ち自ら散らん。散れば而して之を撃てば、克たざる無し矣」

垂は之に従う。

後凉 **[呂光の龜茲など西域制圧]** 龜茲(西域のクチャ)王の帛純(白純とも)は窘急(緊急、呂光に攻められる)し、重く獐胡(龜茲の西)に賂して以て救いを求める。獐胡王は其の弟の唃廝囉、侯將の檀を遣わして騎二十餘

萬を帥いて、並（続は并）びに溫宿、尉頭（晉書後涼記には尉須）等の諸國の兵合わせて七十餘萬を引いて以て龜茲を救わしむ。秦の呂光は與に城西に戦い、大いに之を破る。帛純は出でて走り、王侯の降る者は三十餘國。（6-265p）光は其の城に入り、城は長安の市邑の如く、宮室は甚だ盛んなり。光は西域を撫寧し、威恩は甚だ著われ、遠方の諸國は、前世の服する能わざる所の者は、皆な來たりて歸附し、漢の賜いし所の節傳を^{たてまつ}上る。光は皆な表して而して之を易え、帛純の弟の震を立てて龜茲王と為す。

▲【翟真はさらに中山に逃亡】八月、翟真是邯鄲より北に走り、燕王の垂は太原王の楷、驃騎大將軍の農を遣わして騎馬を帥いて之を追い、甲寅（3日）、下邑に及ぶ。楷は戦わんと欲し、農は曰く、「士卒は饑倦す、且つ賊の營を見るに丁壯を見ず、殆んど他伏有らん。」

楷は従わず、進みて戦い、燕兵は大いに敗る。真是北に中山に趣き、承營に屯す。

▲【鄴包囲を緩めて、苻堅への恩を返す】鄴中は芻糧（まぐさと食料）俱に盡き、松木を削りて以て馬を飼う。燕王の垂は諸將に謂って曰く、

「苻丕は窮寇なり、必ず降る理無し、退きて新城（肥郷の新興城）に屯すに如かず、丕の西歸之路を開き、以て秦王の疇昔（昔）之恩に謝し、且つ翟真を討つ之計を為さん。」

丙寅（15日）夜、垂は圍みを解いて新城に趨く。慕容農を遣わして清河、平原を^{めぐ}徇り、租賦を征（続は徴）督せしめ、農は明らかに約束を立て、有無を均しく適し、軍令は嚴整にして、侵暴する所無し、是に由りて穀帛は路に屬き、軍資は豊給たり。

■戊寅（27日）、南昌の文穆公の^{ちいん}郝愔は薨ず。

【東晋も前秦領土を蚕食】

■【東晋の謝玄は中原をめざす】太保の安（謝安）は奏して苻氏の傾敗に乗じて、中原を開拓せんと請い、徐、兗二州刺史の謝玄を以て前鋒都督と為し、豫州刺史の桓石虔等を帥いて秦を伐たしむ。玄は下邳に至り、秦の徐州刺史の趙遷は彭城を棄てて走り、玄は進みて（淮泗より北に向かう）彭城に據る。

前秦 秦王の堅は呂光の西域を平らげるを聞き、光を以て都督玉門以西諸軍事、西域校尉と為す。道は絶え、通じず。

前秦 秦の幽州刺史の王永は救いを振威將軍の劉庫仁に求め、庫仁は其の妻の兄の公孫希を遣わして騎三千を帥いて之を救わしめ、大いに平規を薊南に破り、勝ちに乗りて長驅し、進みて唐城（中山郡、直隸省保定道唐県、現・河北省保定市唐県）に據り、慕容麟と相い持つ。

■【謝安自ら北征につく】九月、謝玄は彭城の内史の劉牢之をして秦の兗州刺史の張崇を攻め使む。辛卯（11日）、崇は鄆城を棄てて燕に奔る。牢之は鄆城に據り、河南の城堡は皆な來たりて歸附す。太保の安は上疏して自ら北征を求める。甲午（14日）、安に都督揚、江等十五州諸軍事を加え、黃鉞を加える。

西燕 【慕容冲は長安に迫り、苻堅は前の寵愛を皮肉る】慕容冲は進みて長安に逼り、秦王の堅は城に登りて之を觀、歎じて曰く、

「此の虜は何に従りて出ずる哉！」

大呼して冲を責めて曰く、

「奴は何を苦しみて來りて死を送るや！」

冲は曰く、

「奴は奴の苦しみを厭^{いと}い、汝を取りて代わりと為らんと欲す耳！」

沖は少きとき堅に寵有り、堅は遣使して錦袍を以て詔と稱して之を遣る。沖は詹事を遣わして (6-266p) 皇太弟と稱して之に答え令めて曰く、

「孤は今心は天下に在り、豈に一袍の小恵を顧みんや！苟くも能く命を知れば、君臣は手を束ね、早く皇帝 (慕容暉) を送れ！自ら當に苻氏を寛貸し、以て曩好に酬^{むく}いるべし。」

堅は大いに怒りて曰く、

「吾は王景略、陽平公之言 (103 卷寧康三年、前卷太元七年に見える) を用いず、白虜 (秦人は鮮卑を白虜という、鮮卑は肌色が白い) をして敢て此に至ら使める！」

■冬、十月、辛亥 (1日) 朔、日之を食する有り。

■乙丑 (15日)、大赦す。

■謝玄は陰陵 (晉書謝玄傳には淮陵に作る) 太守の高素を遣わして秦の青州刺史の苻郎を攻め、軍は琅邪に至り、朗は來たりて降る。朗は、堅之從子也。

【翟真と旧前秦勢力の反撃】

▲【翟真是苻丕と連携して、冀州の郡縣は形勢觀望】 翟真是承營に在り、公孫希 (劉庫仁が派遣)、宋敞 (王永が派遣) と遙かに相い首尾 (呼応) す。長樂公の丕は宦者の冗從僕射の清河の光祚を遣わし、兵數百を將いて中山に赴き、真と相い結ばしむ。又た陽平太守の邵興を遣わして數千騎を將い、冀州の故の郡縣を招集し、祚と期して襄國に會せしむ。是の時、燕軍は疲弊し、秦の勢いは復た振い、冀州の郡縣は皆な成敗を觀望し、趙郡の人の趙粟等は兵を柏鄉 (直隸省大名道柏鄉県、現・河北省邢台市柏鄉県) に起こして以て興に應ず。燕王の垂は冠軍大將軍の隆、龍驤將軍の張崇を遣わして兵を將いて邀えて興を撃たしめ、驃騎大將軍の農に命じて清河より兵を引いて之に會せしむ。隆は興と襄國に戦い、大いに之を破る。興は走りて廣阿に至り、慕容農に遇い、(農は) 之を執る。光祚は之を聞き、西山に循いて走りて鄴に歸る。隆は遂に趙粟等を撃ち、皆な之を破り、冀州の郡縣は復た燕に従う。

前秦 【劉庫仁は慕容文らに殺害される】 劉庫仁 (匈奴独孤部) は公孫希 (劉庫仁の妻の兄) が已に平規を破るを聞き、大いに兵を擧げて以て長樂公の丕を救わんと欲し、雁門、上谷、代郡の兵を發して、繁時に屯す。燕の太子の太保の慕容暉 (98 卷永和六年にあり) 之子の文、零陵公の慕容虔之子の常は時に庫仁の所に在り、三郡の兵は遠き所 (統は征) を樂しまざるを知り、因りて亂を作し、夜、庫仁を攻め、之を殺し、其の駿馬を竊^{ぬす}んで燕に奔る。公孫希之衆は亂を聞きて自ら潰え、希は翟真に奔る。庫仁の弟の頭眷は代わりて庫仁の部衆を領す。

前秦 【苻丕は窮まる】 秦の長樂公の丕は光祚及び參軍の封孚を遣わして驃騎將軍の張蚝、并州刺史の王騰を晉陽より召さしめて以て自ら救い、蚝、騰は衆少なきを以て赴く能わず。丕は進退の路窮まり、僚佐に謀る。司馬の楊膺は自ら晉に歸せんを請い、丕は未だ許さず。會々^{たまたま} 謝玄は龍驤將軍の劉牢之等を遣わして碣磔 (濟北郡の治所、山東省東臨道茌平県、現・聊城市茌平区) に據らしめ、濟陽太守の郭滿をして滑台 (河南省河北道滑県、現・安陽市滑県) に據らしめ、將軍の顔肱、劉襲をして河北に軍せしむ。丕は將軍の桑據を遣わして黎陽に屯し以て之を拒 (統、據x) ましむ。劉襲は夜據を襲いて、之を走らし、遂に黎陽 (河北道浚県、現・鹤壁市浚県の東) に克つ。丕は懼れ、乃ち從弟の就を遣わして參軍の焦逵と救いを玄に請わしめ、書を致して稱す「途を假り糧を求め、西に國難に赴かんと欲し、(6-267p) 援軍は既に接するを須^まちて、鄴を以て之を與えん。若し西路通じず、長安は陷没すれば、請う所領を帥いて鄴城を保守せん。」

逵は參軍の姜讓と與に密かに楊膺（丕の妃の兄）に謂って曰く、

「今喪敗すること此くの如し、長安は阻絶し、存亡は知る可からず。節を屈し誠を竭くして以て糧援を求めるも、猶ほ獲らざることを懼る。而して公は豪氣除かず、方に兩端を設ければ、事は必ず成る無し。宜しく正書して表を為し、許すに王師之至らば、當に身を致して南に歸すべきを以てす。如し其の從わざれば、逼縛して之を與える可し。」

膺は自ら力能く丕を制せんと以い、乃ち改めて書し而して之を遣る。

■ **【東晋は河南の要地を再び支配】** 謝玄は晉陵太守の滕恬之を遣わして河を渡り黎陽を守らしむ。恬之は、修（吳の將軍で、孫皓の亡びるや晉に歸す）之曾孫也。朝廷は兗、青、司、豫の既に平らぐを以て、玄に都督徐、兗、青、司、冀、幽、并七州諸軍事を加える。

【姚萇の戰略眼は拔群】

後秦 **【姚萇は前秦が滅び西燕が去るを待ちて長安を取らんとす】** 後秦王の萇は慕容冲の長安を攻めるを聞き、群僚を會して進止を議し、皆な曰く、

「大王は宜しく先ず長安を取り、根本を建立し、然る後に四方を經營すべし。」

萇は曰く、

「然らず。燕人は其の衆は歸るを思う之心有るに因りて以て兵を起こし、若し其の志を得れば、必ず久しく關中に留まらず。吾は當に移りて嶺北（陝西省關中道旧西安府）に屯し、廣く資實を收め、以て秦が亡び燕が去るを待ちて、然る後に手を拱いて之を取る耳。」

乃ち其の長子の興を留めて北地を守らしめ、寧北將軍の姚穆をして同官川を守ら使め、自ら其の衆を將いて新平を攻める。

後秦 **【新平の苟輔は地下でも戦いて城を守る】** 初め、新平の人は其の郡將を殺し、秦王の堅は其の城角を缺き以て之を恥じしめ、新平の民望は深く以て病いと為し、忠義を立てて以て之を雪がんと欲す。後秦王の萇が新平に至るに及び、新平太守の南安の苟輔（氏、秦の外戚）は之に降らんと欲し、郡人の遼西太守の馮傑、蓮勺令の馮羽、尚書郎の趙義、汶山太守の馮苗は諫めて曰く、

「昔田單（4 卷周の赧王三十六年にあり）は一城を以て齊を存す。今秦之州鎮は、猶ほ城を連ねること百を過ぎる、奈何して遽に叛臣と為る乎！」

輔は喜んで曰く、

「此れ吾が志也、但だ恐らくは久しく而して救い無く、郡人は横しまに無辜（無実）を被らん。諸君は能く爾らば、吾は豈に生を顧みん哉！」

是に於いて城に憑りて固く守る。後秦は土山地道を為り、輔は亦た内に於いて之を為り、或いは地下に戦い、或いは山上に戦い、後秦の衆の死する者は萬餘人。輔は詐りて降りて以て萇を誘い、萇は將に入城せんとし、之を覺りて而して返す。輔は兵を伏（続、仗×）して邀撃し、幾んど之を獲んとし、又た萬餘人を殺す。

前秦 **【予知能力のある王嘉を苻堅は長安に招く】** 隴西の處士の王嘉は、倒虎山（陝西省關中道臨潼県、現・西安市臨潼区）に隱居し、異術有り、能く未然を知り、秦人は之を神とす。秦王の堅、後秦王の萇及び慕容冲は皆な遣使して之を迎えんとす。十一月、嘉は長安に入り、衆は之を聞き、以為らく堅に福有り、故に聖人は之を助けると、三輔の堡壁及び四山の氏、羌の堅に歸する者は四萬餘人。堅は嘉及び沙門の道安を外殿に置き、動靜は之に咨る。（6-268p）

【慕容暉の誅殺】

▲燕の慕容農は信都より西に丁零の翟遼を魯口に撃ち、之を破る。遼は退きて無極に屯し、農は蒿城（続は藁城、直隸省保定道藁城県、現・石家庄市藁城区）に屯して以て之に逼る。遼は、真之従兄也。

前秦〔前燕最後の皇帝・慕容暉は苻堅に殺される、長安の鮮卑大虐殺〕鮮卑の長安城中に在る者は猶ほ千餘人、慕容紹之兄の肅は、慕容暉と陰かに鮮卑を結びて亂を為さんと謀る。十二月、暉は堅に白し、其の子の新たに昏するを以て、堅に其の家に幸するを請い、酒を置き、兵を伏して之を殺さんと欲す。堅は之を許し、會々天は大雨となり、果たして往かず。事は覺われ、堅は暉及び肅を召し、肅は曰く、

「事は必ず洩れる矣、入れば則ち俱に死せん。今城内（の鮮卑）は已に嚴にして、使者を殺して馳せて出るに如かず、既に門を出ずるを得れば、大衆は便ち集まらん。」

暉は従わず、遂に俱に入る。堅は曰く、

「吾は相い待つこと何如なれば、而して此の意を起こすや？」

暉は辭を飾りて以て對える。肅は曰く、

「家國の事は重し、何ぞ意氣を論ぜんや！」

堅は先ず肅を殺し、乃ち暉及び其の宗族を殺し、城内の鮮卑は少長、男女と無く、皆な之を殺す。燕王の垂の幼子の柔は、宦者の宋牙の家に養なわれ牙の子と為り、故に坐せざるを得る、太子の寶之子の盛と與に間に乗じて出でるを得、慕容冲に奔る。

▲燕の慕容麟、慕容農は兵を合わせて翟遼を襲い、大いに之を破り、遼は單騎にて翟真に奔る。

▲燕王の垂は秦の長樂公の丕の猶ほ鄴に據りて去らざるを以て、乃ち更に兵を引いて鄴を圍み、其の西走之路を開く。焦逵は謝玄に見みえ、玄は丕の任子（人質）を征（続は徴）し、然る後に兵を出さんと欲す。逵は固く丕の款誠を陳べ、並（続は并）びに楊膺之意を述べ、玄は乃ち劉牢之、滕恬之等を遣わして衆二萬を帥いて鄴を救わしむ。丕は饑えを告げ、玄は水陸より米二千斛を運び以て之に饋る。

前秦秦の梁州刺史の潘猛は漢中を棄てて、長安に奔る。（梁州は晉に歸す）

令和2年10月10日	原文完訳開始	11793 文字
令和2年10月17日	完訳終了	23406 文字
令和3年12月16日	書下し終了	24344 文字